

点描：石清水式土器

木崎 康弘

熊本県立装飾古墳館 主幹（学芸課長）

1 はじめに

1998（平成10）年、筆者は、中九州西部の押型文土器編年を取り上げる中で、沈目式土器と石清水式土器の再評価を行なった（木崎1998）。その中で、筆者が主張したかったことは、沈目式土器と石清水式土器を再評価することによって、中九州西部の押型文土器の移り変わりを明確に説明できる、ということであった。今後の中九州西部での縄文時代研究において、この視点については、十分に考慮するべきものと考えている。

さらに、熊本県立装飾古墳館では、筆者が主査となって、平成16年1月18日（日）から3月21日（日）まで、平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』を開催した。この展覧会の中で、新たに深田村（現、あさぎり町深田）灰塚遺跡を取り上げ、その土器型式の設定意義を再度確認したのであった。

本稿は、こうした問題提起を受けたものとして、新たな資料の追加を試みるものである。特に、ここで紹介する灰塚遺跡の石清水式土器は、石清水遺跡で発見された標式資料に酷似するものである。その意味でもここで提示する資料の重要性は明らかである。

2 石清水式土器の発見と提唱、その再評価

（1）発見と提唱の経緯

戦前の縄文時代研究を牽引した小林久雄は、1934（昭和9）年に押型文土器に関する研究を行なった。「所謂楕円捺型文土器に就て」がその論文である。これは、八幡一郎が1932年に発表した「楕円捺型文土器」発表を受けてのものであった。その時に紹介されたのが、豊田村（現城南町）から採集された資料であった。

この中で、小林氏は、土器の色調、胎土、焼成、器厚、口縁形状、胴部形状、底部形状、器形、文様帶、文様についてその特徴を紹介した。そして、その編年的な位置付けを「御領貝塚に於て楕円捺型文土器が御領固有の平行直線文土器と併出する以上」、楕円捺型文土器を「肥後縄文末期土器の一形式と見て差支えないであろう。」とし、さらに、「此事実は楕円捺型文土器の多くが古式縄文土器と見做されてゐる今日、肥後縄文土器の一面を語る興味ある問題」とも述べた。

後に、沈目式土器として型式設定された関係資料である。

一方、ある土器が、その翌年に見つかった。少々長い引用となるが、その経緯を発見者、高田素次の文章「一尺の差」（『嘘のような本当の話』所収）の中から紹介することとしよう。

* * * *

「木上村から川村の柳瀬を通って、観音寺の裏に真直に通ずる県道が、頂度その頃工事中のことだったから、さうさうあれからもうかれこれ三四年は立っていよう。

丁度その頃腎臓炎で入院していた妻を見舞うべく、久しぶりで自転車に乗って、私は人吉へ出かけて行ったのだったが、その途中、その工事場を通りかかったのだった。

柳瀬から真直に来た新道が、旧道と落合って湯前線の陸橋を渡ろうとする僅か手前の所まで来た時である。北側の断層一と言っても、実は畠だった所が一間半程掘りさげられたために出来た一種の地層の断面なのである一に、土器の破片みたいなものが、ちらちらッと眼に映つたのであった。

自転車の上からのことではあったが、ほんの一瞬、それが土器であることを直感して、自転車を飛びおり、竹べらを拾って掘ってみると、それがまたすばらしい、これまでに郡内ではまだ一片も見つかっていなかった山形押型文の、然も完形を復元し得るだけの大きなしろものであったのには、何とも言い様のない驚ろきと喜びでいっぱいだったのだった。そのため、妻との約束の時間を三時間もおくらしてしまつて、さんざん叱言をくったあとで、そつとハンドバックをひらいて、土器のかけらを山ほど出して見せた時は、心から喜こんでくれた妻だったが、今になって考へてみると、あの時のあの嬉しそうな顔が妻の最後の顔だったのである。

ところで、なぜそう三時間もかかったかというと、第一壊れない様にと入念に少しづつ竹べらで掘りにかかったのだったが、地表下三尺五寸ほどのかたい粘土みたいな層の中にうまつてゐるのではあり、シャベルなしでそれを掘り取るといふことは、ずゐ分無暴でもあったのであった。もしもあの時あの令嬢が一前に言ふのを忘れたが、実はこの時丁度道を通りかかった名も知らない令嬢があつて、一生懸命竹べらで掘って加勢してくれたのだったー加勢してくれなかつたら、私はもっとおくれて夕方頃しか病院へは行けなかつたのだったかも知れない。

妻を亡くしてすでに三年になるが、この頃余計に私はあの時の令嬢が思い出されるのである。

それはさうと、あの県道がもしも今一尺南寄りに測量されてゐたならば、恐らくあの鉢型土器は完全に掘りとられ、あの様に真半分が切りとられはしなかつたかも知れないと同時に、また一生我々の眼にはつかなかつたのかも知れない。がまたもう一尺北に寄つてゐたとしても、それこそ恐らくあの土器は一かけも残らず道路の下に掘り込まれてしまつてゐるかも知れない。一尺どちらに寄つても我我は結極はあの土器を見ることは出来なかつただろう。丁度あの土器の埋つてゐた場所が半分でも道路にかかつたお蔭で、半分でも残されたのだったといふことを泌々と考へたのだった。」

* * * *

このように、高田素次は、1935（昭和10）年、熊本県人吉町（現、人吉市）石清水の道路工事現場で土器片を見つけた。この発見にいち早く注目したのが、『考古学』誌上に「所謂楕円捺型文土器に就て」を発表して間もない小林久雄であった。小林は、この土器の器形の特異性

に注目したのであった。1939（昭和14）年のことである。『人類学先史学講座11』に所収されている「九州の縄文土器」（小林1939）がその掲載論文であった。

その中で、小林は、この土器を「口縁に近く環行する横直線がある外は、口縁より底部に至るまで一面に山形連続文が施され、内面にも口縁に近い部分に同種文様が附せられ」、「形態は稍大きな深鉢形で口縁は外曲し、胴部には上下二箇所に膨みがあり、底部は平底で上げ底になつてゐる」と説明した。また、その編年的な位置付けについては、御領式土器の底部に類似している上げ底状の平底であることから、その時期であるとも匂わせていた。「石清水式土器」の登場である。

（2）再評価と型式的特徴の抽出

「石清水式土器」は、今日に至ってもその取扱いは未成熟のままであった。このことについて、筆者は、憂慮すべき事態である、とも評したところで、こうした現状を批判し、「石清水式土器」の再評価を試みたのである（木崎、1995、1998）。



第1図 沈目式土器と石清水式土器

「石清水式土器」を、小林氏は次のように説明した。多少表現をかえて再度紹介してみよう。

- ・口縁に近くに横直線があるほかは、口縁より底部までの全面に山形連続文が施され、口縁内面にも同種文様がつけられている。(第1図)
- ・形態は深鉢形で口縁は外反し、底部は平底で上げ底。(第1図)

ところが、松舟博満氏によって、小林氏図示の形状とは違ったことが明らかになったのである。石清水遺跡出土の土器は、円筒形ではなく、上げ底の平底と丸みのある胴部から外反しながら口縁部へ至るという形状をとっているのである(木崎1998)。

こうした新知見の下、筆者は、石清水式土器を次のように説明した(木崎1998)。

- ・形状は、上げ底の平底、丸みのある胴部から外反口縁。
- ・文様は、間のびしていて、しかも浅い彫り込みの施文原体が使用されている。

さらに、石清水式土器の編年的な位置を、こうした説明を踏まえ、南九州の押型文土器群の中で、もっとも新しく位置付けられている手向山式土器の文様に共通するところが多いことから、中九州西部の押型文土器群の中でも、もっとも新しく位置付けられる、としたのである(木崎1998)。そして、中九州西部の押型文土器編年を、「稻荷山式→早水台式→下菅生B式→沈目式(・田村式)→石清水式」と結論付けたのであった(木崎1998)。

そこで、石清水式土器の型式的特徴を整理し、その意義を明らかにしておきたい(木崎1998)。

石清水式土器は、沈目式土器に後続する中九州西部の押型文土器の1土器型式である。器形は、平底、外反口縁、そして丸みのある胴部をもっている。文様は、手向山式土器と同じ、間のびしての、浅い彫り込みの施文原体で付けられる。

ところで、人吉市石清水遺跡出土の土器は、上げ底の平底を呈していて、手向山式土器によく似た土器である。ただし、石清水式土器が手向山式土器と決定的に違う点がある。それは、石清水遺跡や無田原遺跡の土器が示すように、手向山式土器特有の屈曲胴部を持たないところである。要するに、手向山式土器に近い文様を持ちながら、中九州西部のそれまでの押型文土器の器形を基本的に踏襲する土器ということで理解できるのである。そこに、中九州西部の押型文土器群の移り変わりを考えるうえでの、石清水式土器の意義が存在するのである。

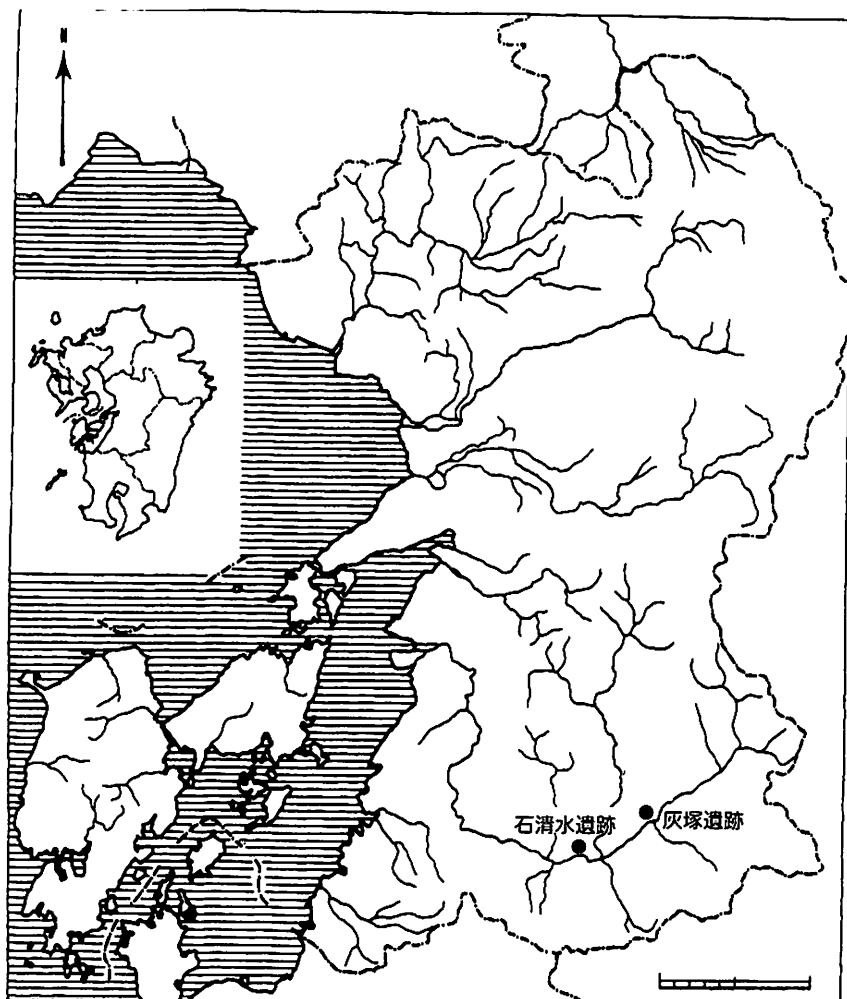
3 熊本県灰塚遺跡発見の石清水式土器

石清水式土器は、石清水遺跡の他、無田原遺跡、大丸・藤ノ迫遺跡、天道ヶ尾遺跡、瀬田裏遺跡、中後迫遺跡、ワクド石遺跡などで発見されている。現状では、まだまだ資料数も限られている。ただし、おそらく、関連資料の増加は、微妙な資料を除けば、その型式的特徴が明確であり、期待できるところもある。

こうした中、良好な土器が灰塚遺跡で発見された。重要な資料ということもあり、敢えてここに紹介するものである。

(1) 灰塚遺跡

灰塚遺跡（熊本県教育委員会2000）は、熊本県球磨郡あさぎり町深田にある（第2図）。遺跡は、球磨川沿いの洪積台地上にあり、球磨川沿いに広がる沖積地を一望できるところに位置している。発掘調査は、県営須恵・深田地区緊急畠地帯総合整備事業に伴って実施された。その調査年度は、1992（平成5）年度から1996年度に及んでいる。調査の結果、先土器時代から中世までの遺構、遺物が発見された。



第2図 灰塚遺跡と石清水遺跡

先土器時代では、地形改変が原因で明確な包含層を確認できていない。石器としては、三稜尖頭器等が発見された。このことから、姶良Tn火山灰上位の石器文化が存在していたことが分かる。

縄文時代では、早期が中心で、わずかに前期、後期、晩期の土器、石器が発見された。早期の遺構としては、集石68基、土坑35基がある。特に注目されるものは、壺形土器を埋納した土坑である。遺物には、下菅生B式土器、沈目式土器、石清水式土器、手向山式土器などの押型文土器群、天道ヶ尾式土器、塞ノ神式土器などがある。石器には、石鏸、削器の他、後期や晩期の扁平打製石斧などがある。

古墳時代では、竪穴式住居跡がある。古代では、土壙墓や掘建柱建物跡が見つかった。また、中世では、中世武士の本格的な館跡が見つかり、古代末から中世前半期の郡衛跡とも評価され、注目を集めた。

(2) 石清水式土器

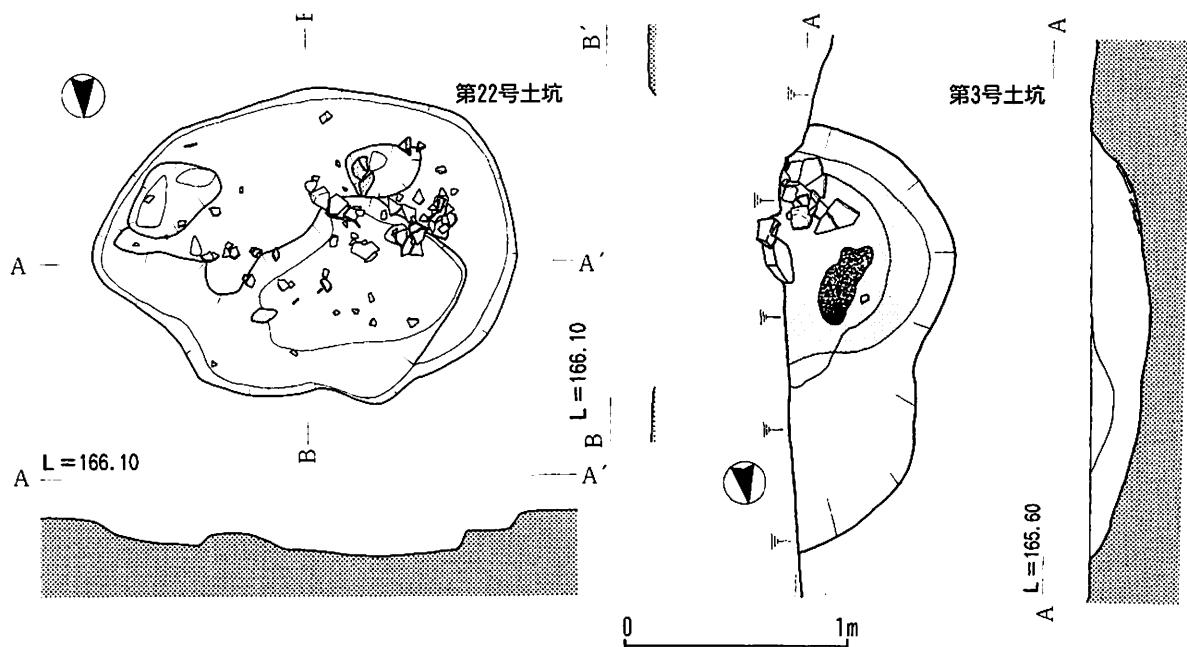
紹介する石清水式土器は、その全体像が窺える2点である（第3図1、2）。器形、文様、施文原体、法量の順に見ていくことにしよう。

1は、22号土坑（第4図）で見つかった石清水式土器である。底部を欠いた資料である。器形は、ラッパ状に大きく開く口縁部、わずかに膨らむ胴部によっている。文様は、山形の押型文である。表面の頸部から口縁部にかけては、縦方向の施文、胴部では斜め方向の施文である。また、裏面口縁部には、横方向に施文されている。文様は、間のびしての、浅い彫り込みの施文原体で付けられるもので、手向山式土器に近似したものである。これらの特徴から石清水式土器と認識できる。また、その全体の形状は、かつて高田が石清水遺跡で発見した石清水式土器によく似たものである。口縁径39cm、胴部径31.5cm。現状高28cm。

2は、3号土坑（第4図）で見つかった石清水式土器である。胴部下半から底部を欠いた資



第3図 灰塚遺跡の石清水式土器



第4図 石清水式土器出土の土坑

料であるが、型式的特徴を十分に窺わせる。器形は、ラッパ状に大きく開く口縁部、丸く膨らむ胴部によっている。文様は、山形の押型文。表面の頸部から口縁部にかけては、縦方向の施文、胴部では斜め方向の施文である。また、裏面口縁部には、横方向に同じ文様が施されている。文様は、間のびしての、浅い彫り込みの施文原体で付けられるもので、手向山式土器に近似したものである。これらの特徴から石清水式土器と認識できる。口縁径39cm、胴部径28cm。現状高28cm。

4 おわりに一点描から今後に向けて—

ここで紹介した2点の資料については、石清水遺跡発見の標準資料と比較しても、典型的な石清水式土器と評価できる。その意味でも、石清水式土器の評価を行なううえで、見逃せない資料となるだろう。

そこで、本稿を閉じるに当たって、今後の展望を示すこととした。

中九州西部の押型文土器の移り変わりについては、前記したように、「稻荷山式→早水台式→下菅生B式→沈目式（・田村式）→石清水式」（木崎1998）という変遷案で整理できる。それは、器形と施文の変化で認識できる変遷でもあるが、どのように地域性が形成されていったのかを、土器製作の面で考えるヒントを与えるものである。特に、沈目式土器から石清水式土器への変化は、中九州西部での押型文土器の型式変化として重要な意味を持つものである。

また、中九州西部の石清水式土器と南九州の手向山式土器との関係も重要な意味を見出せるものである。例えば、南九州での手向山式土器の成立を考えるうえでの、石清水式土器の役割は重要である。具体的にいえば、手向山式土器の屈曲胴部、沈線文等々の特徴は、南九州での

土器伝統に根ざしたものであり、一方、手向山式土器の押型文は、石清水式土器の押型文施文が刷り込まれたと考えることも可能なのである。こうした視点は、中九州西部の石清水式土器を評価する中で、さらに鮮明になっていくものと考えられる。

【謝辞】平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』の企画・開催という機会が与えられなければ、本稿を起稿することは無かつた。本稿を閉じるにあたって、御芳名を掲げて、感謝の意を表し述べたい。

清田純一、北川賢次郎、古屋松硬子、渋谷敦、高田睦子、高田剣、鶴嶋俊彦、出合光宏、原田正史、福原博信、帆足俊文、前田一洋、和田好史、江本直、角田賢治、池田朋生、吉里美枝子、大友由紀、人吉市教育委員会、相良村教育委員会、五木村教育委員会、山江村教育委員会、あさぎり町教育委員会、城南町教育委員会（敬称略）

文献

- 大津町教育委員会1992『瀬田裏遺跡発掘調査報告資料Ⅰ』
乙益重隆1967「九州西北部」『日本の考古学』Ⅱ 河出書房新社
木崎康弘1998「中九州西部押型文土器の編年」『縄文集成シリーズ 九州の押型文土器一論攷編』 九州縄文研究会
熊本県教育委員会1986『大丸・藤ノ迫遺跡』
熊本県教育委員会1990『天道ヶ尾遺跡』
熊本県教育委員会1995『無田原遺跡』
熊本県教育委員会1994『ワクド石遺跡』
熊本県教育委員会2000『灰塚遺跡（1）—熊本県球磨郡深田村字灰塚所在の遺跡—』
小林久雄1934「所謂楕円捺型文土器に就て」考古学5-6、『九州縄文土器の研究』 小林久雄先生遺稿集刊行会
小林久雄1939「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11、『九州縄文土器の研究』 小林久雄先生遺稿集刊行会
小林久雄1948「捺型文土器の諸問題」『九州縄文土器の研究』 小林久雄先生遺稿集刊行会。
小林久雄1949～50「肥後の縄文式土器」『九州縄文土器の研究』 小林久雄先生遺稿集刊行会
小林久雄1967『九州縄文土器の研究』 小林久雄先生遺稿集刊行会
中後迫遺跡発掘調査団1978『中後迫遺跡』
高田素次1984『嘘のような本当の話』
高田素次1986『しらがね帖』
三島 格1965「原始・古代」『城南町史』 熊本県城南町